

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

写真家、志岐利恵子さんに教えてもらい東吉野村の日裏の秋祭りに出かけた。昔は旧暦9月9日だったが、新曆換算して今年は10月2日が祭りの日だった。

日裏の集落は、東吉野村のほぼ中央にあり、水を司る神で知られる丹生川上神社中社から日裏川を5キロほど遡る。溪流の水音と植林されまっすぐに立ち上がった林相が素晴らしい。谷側に林業用のヘリポートが見えると、その先の山の斜面に天一神社がある。集落はさらにその奥で、標高700ほどの日当たりのよい斜面に家が点在している。

日裏集落の名が歴史に現れるのは戦国時代からであるが、「日裏」という地名は、天川村や西吉野村(現・五條市)などにもあり、日当たりのよい斜面に立地した場所を

さすようだ。社殿そばの元禄6(1693)年の石灯籠には「日浦」と刻まれている。

江戸時代から杉や松の林業が発達し、明治15(1882)年ごろ調査

の『大和国町村誌』には、特産は材木や和紙の漂白に用いられる灰汁灰で、戸数は10軒、人口は36人とある。大正元(1912)年には12戸88人いたという。林業が盛んだったときは、地区外からも「山行きさん」が大勢来て、樽の素材となるタルマル作りも盛んだった。地元の日裏小学校もあつたが、のち高見小学校の分校になり、その校舎は今、地区の集会所となつて、ここで祭りの準備などが行われる。

午前9時半ごろ神社に

祭りが終わり、御神酒をいたたく人々。東吉野村の天一神社で2022年10月2日、勺樋子さん撮影



安産の神として周辺地域から信仰され、境内の杉の大木の皮が安産のお守りだ。このお守りをもらって何年もできなかった子どもを授かった人という。

現在、日裏は鶴井家、鳥岩家、喜多家の3軒6人だが、この日、午前10時前には、文字通り老若男女40人ほどが続々と集まってきた。あちこちで話が弾んでいる。子供の頃は、境内に入りきれないほど人が来たと話してくれた人もいる。生まれて2カ月の赤ちゃんも元気よく泣いている。それを見た老婦人は「ゴンタ張らんと大きなれへん。こんな子は明日になったらもう大きくなってワ」と話している。みんな日裏の祭りを楽しみにして

日裏の明神さんの祭り

いるのが分かる。ふだんは前日に集会所でみんな餅搗きをして会食をする。甘酒も作り、餅は多いときは7斗も搗いた。この餅を入れた桶や甘酒や扇御幣、神饌を入れた狭み箱など、神社まで行列するのは、10人は必要になるという。この日は、神社境内の上の高所で神事が執り行われたあと、新型コロナウイルスの流行に配慮して、ゴクマキ(餅撒き)は形だけ行われた。そのあと参拜者に御神酒が振る舞われ始めた。するとそれまで薄暗かった境内に、林間から一条の光りが御神酒を注ぐ今年と来年のトーヤの鶴井氏と鳥岩氏の周囲に降り注ぎ、そこだけが明るく浮き上がっていた。

翌年の祭りは10月22日。来年こそは、今まで通りのお祭りができるような気がしてきた。(奈良民俗文化研究所代表)